

# 根拠を表す「～ノコトダ（カラ）」におけるコトの分析

湯本 かほり（筑波大学大学院生）

## 0. はじめに

本発表では、名詞句に続き根拠を表す「コトダカラ」（以下、コトダ、コトも合わせて「コトダカラ形式」とする）を考察の対象とする。

- (1) a. あの男のことだから、さぞかし貧欲に学んでいるにちがいない。  
(藤巻一保「陰陽魔界伝」)
- b. あの男のことだ。さぞかし貪欲に学んでいるにちがいない。
- c. あの男のこと。さぞかし貪欲に学んでいるにちがいない。

前件の「名詞句+ノコトダ（カラ）」は、後件に続く判断や推量の根拠を示している。「名詞句+ノコトダ（カラ）」は「カラ」を省略して文末化することも可能であり、更には「名詞句+ノコト」だけでも後件を導くことができる。

さらには、この種の形式においては前接名詞において有生名詞—特に人名詞を多くとる傾向がある。これは、任意で現れるノコト目的語が有生名詞をとることと共通する性質である。

そこで、本発表では以下の点を明らかにすることを目的とする。

- ① 根拠を表す「～ノコトダカラ」「～ノコトダ」「～ノコト」各形式における「コト」の意味・機能を明らかにすること。なぜ、各形式が同様に「根拠」を表しえるのか。
- ② なぜ、前接名詞に人名詞を多くとるのか。

## 1. 先行研究概観

ここでは、文型辞典の各種の記述と、根拠を表すコトダについて記述のある備前(1989)、坪根(1996)を概観する。

『日本語文型辞典』、『日本語表現文型辞典』によると、それぞれ「Nのことだから」「のことだから」という項目で以下のような説明がされている。

「主として人を表す名詞につく。話し手も聞き手もよく知っている人物について、その人の性格・行動パターンにもとづいて何らかの判断をくださす時に使う」（『日本語文

型辞典』)

「～のことだから、…」の形で、互いにわかっていることから判断して、推量したことを言う。「～」で、話す人の判断の根拠を言う<sup>1</sup>。」(『日本語表現文型辞典』)

備前(1989)では、「～ことだ」を有する名詞述語文について下位分類し、そのうちの一つに「前の部分の理由や根拠になっているもの」を挙げている。そして、「～ことだ」を省いても文意に変化がないことから、根拠を表すのに「～ことだ」は必須の要素ではないことを述べている。

坪根(1996)でも、「理由・根拠」を表す用法について、「こと」自身が後に続く部分の理由や根拠になるというわけではなく、「ことだ」が「主観回避」的なニュアンスを付け加えるという機能を持つということを指摘し、更には助動詞化が進んでいるとした。

備前(1989)や坪根(1996)での対象は、節を受ける場合の「ことだ」であり、本研究が対象とする「名詞句+コトダカラ」とはレベルが異なる。そして、コトダは節レベルと名詞句レベルでは制約が異なる。坪根(1996)では「こと」を省略しても内容的な意味の違いはさほど見出せないとしているのに対し、名詞句レベルではコトを省略するとやや舌足らずな印象を受ける、あるいは非文となる。

- (2) a. 彼も二度とこんなことはしないと言っていることだ。今回は許してやろう。  
a'. 彼ももう二度とこんなことはしないと言っている。今回は許してやろう。  
b. イギリスへ一人で行くといっても、おばさんが向こうにいることだし、心配しなくても大丈夫だよ。  
b'. イギリスへ一人で行くといっても、おばさんが向こうにいるし、心配しなくても大丈夫だよ。
- (3) a. あなたのことだから、大丈夫よ。  
b. ??#あなただから、大丈夫よ。
- (4) a. あいつのことだ。遅れてくるだろう。  
b. \*あいつだ。遅れてくるだろう。

先行研究では「ことだから」は根拠を表す用法を有すること、そして助動詞としての「ことだ」についての言及がある。しかし、「名詞句+コトダカラ」について、冒頭に挙げた疑問点について言及したものは管見の限りでは見られない。

---

<sup>1</sup> なお、『日本語表現文型辞典』では時名詞、人名詞の例を挙げている。

## 2. コトダカラ形式の出現環境

根拠を表すコトダカラ形式を特徴づける出現環境を見るために、『現代日本語書き言葉均衡コーパスモニター公開データ 2009 年度版』を利用し「コトダカラ」「コトダ」「コト」の各形式の用例を採集した<sup>2</sup>。

### 2. 1. 前件の特徴

#### 2. 1. 1. 前件にみられる表現

前件に見られる表現に注目してみると、前接名詞は指示詞を伴う例が見られる。そのほか、特定の個人を指す固有名がほとんどである。このことから、話者および聞き手にとって対象となる名詞句は参照可能であることがわかる。

- (5) 「でも、あの奥さんのことだから、ここへのりこんできて、強引にあなたを連れていくかもしれないわね」(渡辺淳一「愛のごとく」)

また前件には、名詞句単独ではなく修飾節を伴い現れ、修飾部は性格、性質、過去にあった出来事に関する内容のものであり、特定の人物を特徴づけるものである。

- (6) 話を適当に受け流すという芸当ができない俺のことだ、彼女に促されるまま軽い気持ちで説明しているうちに、例の、彼氏が付いていない隙を衝かれて変質者に襲われそうになった、という一件にまで不用意に触れてしまいかねない。

(西澤保彦「瞬間移動死体」)

また、副詞「なにしろ」、接続詞「もっとも」「とはいえ」と共起する例が見られる。

- (7) 「もっとも、彼のことだからな。バスクで何をしているかは、分らないけどな」  
(森詠「冬の翼」)

- (8) 近くなのでけっこう寄ったりもするのですが、なにしろ卸屋さんのこと。通りかかるとやっていないこともけっこうあります。(林光「職人技を見て歩く」)

- (9) 伊角のこれからの人生を考えたら、合格できない方が良かったのではないでしょうかと、とはいえ、実力はある伊角のことですから、巡り合わせが変わってれば、

---

<sup>2</sup> 対象コーパスを「書籍」のみに絞り、「のことだから」「のことですから」「のことだ」「のことです」「のこと」で検索した。

この年に受かってしまった可能性もありますよね。

(ヒカ碁研究会『『ヒカルの碁』の秘密』)

## 2. 2. 2. 先行名詞句の特徴

グループジャマシイ(1998)に「主として人を表す名詞につく」とあるように、多くの場合前接名詞に有性名詞—特に人名詞をとるということが観察される。一方で、無性名詞をとる例も比率としては低いが確認することができる。多くは場所名詞だが、(10)のような例が1例見られた。

(10) 韓国のホテルのことだから、喫煙に関してはうるさくない。

(森巢博「極楽カジノ」)

(11) いや、味噌のことですから腐りはしないでしょうが、くるみが混っているために味が変わって、売り物にならなくなったということです。

(山本周五郎「樅ノ木は残った」)

また、コトダカラ形式が根拠を表す文脈において使用されているものの中に、時名詞を伴う用例が多く観察された。

また、コトダカラよりもコトダ、コトにおいて多く人名詞をとるということがわかる。

表1 前接名詞の特徴

	のことだから(155)	のことだ(45)	のこと(30)
時名詞	28(43)	-	10(3)
有生名詞	62(96)	93(42)	70(21)
無生名詞	10(16)	7(3)	17(5)
抽象名詞	-	-	3(1)
			%、(用例数)

コトの先行名詞に人名詞が多くみられることについて、コトの性質と推量・判断をするときに何を根拠にするかという点から考察したい。

根拠とは、ある判断に至るための「拠りどころ」となるものである。森田・松木(1989)によれば「ニヨッテ」には、根拠を表す用法があり、物ではなく事柄を表す名詞を受けられる場合が多い。

(12) この期間の教育が、中央政府の詳細な指示により、全日本において、全く画一的に行われることは驚嘆に値する。

(森田・松木(1989)、波線部は発表者による)

根拠はモノからは得られないものであり、コト（事態、事実など）から得られるものと考えられる。

そしてコトダカラ形式においては、時名詞や人名詞、場所名詞などをとる。時名詞においては、コトは「出来事」のように具体的な名詞に置き換えることが可能である。そうした出来事を元に、推量・判断をする。

人名詞や場所名詞においても、出来事や事態を読み込むことが可能である。しかし、無生名詞については、対象についてよく知り得ている場合でもコトダカラ形式を用いて根拠とすることはしにくい。

(13) ??この本のことだから、難しくてなかなか読み進まないだろう。

そのため、無生名詞の例は人が活動する場所名詞、人名詞の例が多く、無生名詞の例が少ないといえる。

## 2. 2. 後件の特徴

後件には、根拠に基づいた話者の判断や推量が続く。そのため、判断の確信度を示す副詞（「きっと」「てっきり」「おそらく」「たぶん」）、程度の甚だしさを推し量る副詞「さぞかし」、「さぞ」や文末にモダリティ（「まい」「だろう」）を伴う例が見られる。

## 2. 4. コトダカラ形式の特徴

以上の観察から、コトダカラ形式には以下の特徴が挙げられる。

- ① 前件における先行名詞には参照可能な人名詞をとる。また、人間の活動が見込まれる場所名詞や国名、組織名などもとることがある。
- ② 後件には判断や推量が続き、確信度の高いものから低いものまでである。

## 3. コトダカラ→コトダ→コト

原因・理由を表す「カラ」を伴わずに、「コトダ」さらには「コト」のみでも、根拠を表し後件を導くことができる。これは、コト自体が根拠を表すためなのだろうか。

表1における用例数から考えて、根拠を表すのは「コトダカラ」が基本でありそこから省略が進み、「コトダ」→「コト」となっていったと考えられる。

「コトダ」「コト」のみでも根拠を十分表しえるのは、前接名詞・そして出現環境によ

って類推が可能となるためである。こうした条件が揃わない場合では、根拠を表しているのか判断しにくい。

- (14) a. ?人のことだ。罪を犯してもおかしくない。  
b. あの人のことだ。罪を犯してもおかしくない。

#### 4. コトダカラにおけるコトの意味・機能

コトは、前述 (3)(4) のようにコトが省略不可であることからコトには何らかの意味・機能があるということが考えられる。では、「根拠」を表すという用法の中で「コト」はどのような意味・機能を担っているのだろうか。

以下のように修飾部や後件の情報から、コトの意味は復元可能である。

- (15) すでに三人も殺している 彼のことだから、津矢子をこの世から抹殺するという結果も十分あり得るのだった。(笹沢左保「見えない宝石」)

- (16) 彼のコト：彼は過去に三人も殺している

坪根(1996)では、助動詞としての「コトダ」が「主観回避」のニュアンスを付け加えるとしている。その証拠として、「私」が主語となり主観を表す文とは共起しないということを挙げている。

- (17) a. 私はケーキが好きだし／??好きなことだし、ダイエットはできないだろう。  
a'. 彼はケーキが好きだし／好きなことだし、ダイエットはできないだろう。

しかし、名詞句レベルでは次のように言うことが可能である。この時も同様に、「主観回避」という観点からの説明が可能なのであろうか。

- (18) 私のことだ、ダイエットはできないだろう。

(17)では、自分の性格—例えば、食いしん坊だ、ケーキ好きだ…といった事実に基づいて推量を行っている。

「ことだ」には、「既に知られている事態を理由として取り上げる」という既定命題性という性質がある(前田 2006)。このことから、コトダカラ形式におけるコトには話し手の対象についての既定的な知識が反映されており、その際、(18)のように言えること

から主観性や客観性については中立であるといえる。

そして、コトによって話し手の中で対象について捉え直し（コト化）、知り得ている既定的知識から推測や判断を導くのが、コトダカラ形式の特徴であると考えられる。

## 5. まとめと今後の課題

本発表では、根拠を表すコトダカラ形式に着目し、以下の二点について考察した。

- ① 根拠を表す「～ノコトダカラ」「～ノコトダ」「～ノコト」各形式における「コト」の意味・機能を明らかにすること。なぜ、各形式が同様に「根拠」を表しえるのか。

各形式が同様に根拠を表しえるのは、先行名詞句や前後の文脈からの類推によるものであり、そうした条件が省略を可能にしているのであり、「コト」のみが根拠を表しているとは言えない。

判断を表すコトダカラ形式におけるコトは、主観性や客観性を問題にするのではなく、話し手の既定的知識を提示する。

- ② なぜ、前接名詞に人名詞を多くとるのか。

根拠はコトから得られるものである。人名詞や人の活動が認められる場所名詞・機関名などには、コトが読み込むことが可能であるが、無生名詞においては根拠となるためのコトは読み込みにくいためである。

以上、根拠を表すコトダカラ形式について考察した。今後の課題としては、「既定命題性」という概念の有用性を検証することである。また、節レベルと句レベルではコトの制約が異なるということが観察された。そのことについても合わせて考察していく必要がある。いずれも今後の課題としたい。

## ＜参考文献＞

- 安達太郎(1998)「認識的意味とコト・モノの介在」『世界の日本語教育』8, 203-217.
- グループ・ジャマシィ(1998)『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版.
- 坪根由香里(1996)「「ことだ」に関する一考察—そのモダリティ性を探る—」『ICU 日本語教育研究センター紀要』5, 45-62,92.
- 寺村秀夫(1992)「モノとコト」『寺村秀夫論文集 I』くろしお出版.
- 友松悦子ほか(2007)『どんな時どう使う日本語表現文型辞典』アルク.
- 中右実(1981)「変形と意味の原理」『英語青年』127-7, 426-430.
- 備前徹(1989)「「～ことだ」の名詞述語文に関する一考察」『滋賀大学教育学部紀要』33, 1-12.
- 前田直子(2006)「原因・理由の暗示的累加を表す従属節—こともあって・ことだし—」藤田保幸(編)『複合辞研究の現在』和泉書店.
- 松木正恵(1990)「複合辞の認定基準・尺度認定の試み」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』2, 27-52.
- 宮崎和人(2005)「推量の疑問化と「コト」」『現代日本語の疑問表現』ひつじ書房.
- 榎山洋介(1995)「文末の「～コトダロウ」における「コト」の意味分析」『日本語論究 4 言語の変容』和泉書院.
- 森田良行・松木正恵(1989)『日本語表現文型』アルク.

## ＜使用コーパス＞

『現代日本語書き言葉均衡コーパスモニター公開データ』2009 年度版